

東洋史研究

第三十八卷 第四號 昭和五十五年三月 發行

八世紀以前のターリム盆地地方の 毛織物生産について

山 本 光 朗

はじめに

一 これまでの研究状況

二 毛織物製品について

三 ターリム盆地五王國の毛織物生産

(一) 高昌王國 Turfan 地域

(二) 焉耆王國 Kara-shahr 地域

(三) 龜茲王國 Kuchā · Ak-su 地域

(四) 疏勒王國 Kashgar · Yarkand · Tash-kurghan 地域

(五) 于闐王國 Khotan · Keriya 地域

結 語

は じ め に

517 は、紀元五世紀の初頭、ターリム盆地地方で主要な王國の一つであった于闐王國(Khotan 地域にあった王國)について法顯「其國豐樂、人民殷盛、盡皆奉法、以法樂相娛」^①と述べている。さらに、七世紀前半この王國を通った玄奘もほぼ同

じ趣旨で、「衆庶富樂、編戸安業^②」と述べている。法顯の場合は佛教的色彩が強いとは言え、これら二つの記事は當時の于闐王國の安定した繁榮ぶりを充分に寫し出している。五世紀前後に滅亡してしまった樓蘭（または鄯善）王國など例外はあるが、八世紀以前のターリム盆地の諸王國はこの于闐王國の例からみても分るように、かなり安定した繁榮をしていたように思われるのである。

それでは、このような安定した繁榮の姿、それはどのような原因によってもたらされたのであろうか。それについては從來、この地方が中國の絹織物などの中繼商業に従事しており、その結果このような繁榮がもたらされたのだ、と考えるのが一般的であった。確かにこのような考え方は、この地方の繁榮を解く非常に有力な考え方ではあったろう。しかし一方で、中繼商業を重視するあまり、ターリム盆地地方の「他の諸産業」を輕視する傾向をもたしてしまったことは否定出来ない事實である。^③ 私は、この「他の諸産業」がターリム盆地地方の安定した繁榮に、中繼商業に劣らないほど重要な意義を持っていたものと思う。本稿は、この「他の諸産業」のうち現在もターリム盆地地方で重要な産業の一つとなっている毛織物生産について、その八世紀以前の状況を明らかにしようとするものである。

なお、本稿で「西域」という場合には、ターリム盆地地方もその一部に含む「中央アジア地方」というぐらいの意味である。

一 これまでの研究状況

八世紀以前のターリム盆地地方の毛織物生産について最初に興味深い形で意見を述べられたのは、この地方を發掘調査した M. A. Stein 氏であった。氏は、多くの毛織物生産に関する資料を發掘する一方、たとえば Khotan^④ 地域について次のように述べておられる。この地域では豊富な羊毛をもとにカーペットやフェルトが作られているが、それらの製品はトルキスタンを通して有名であり、古い時代でも同じ状況であったことは玄奘の記述によって分かるのである、と。^⑤ 玄奘

の記述については後に觸れるが、この氏の發言は、考古學的遺物・當時の實狀・史料の三つを參考にしている點で非常に説得的なものであったと言えよう。同様なことは、同じくターリム盆地地方を發掘調査した黃文弼氏の場合にも言える。

氏は、ターリム盆地北部の Kucha 地域で八世紀のものと推定されたカーペットの斷片らしきものを發掘されたが、それについて次のように述べておられる。史料を見るとこの種のもものは古くから西域の名産であつたらしく、今も和闐 (Khotan)・喀什 (Kashgar) などでは、西方 (西トルキスタン方面を指していると思う) ほどではないが上質なものが作られている。^⑥と。氏の場合も Stein 氏と同様なことが言えると思う。これら兩氏によって、ターリム盆地地方の毛織物生産については、かなり明確なイメージを持つことが出来るようになったのである。ただ兩氏もやはり、より華麗な、(中國の) 絹織物^⑦に重點を置いておられたことは否めず、ターリム盆地地方の毛織物生産についてはもう一つ詳しく觸れることはなかった。

ところで、中國の史書にはかなり古くから一貫してターリム盆地地方の毛織物生産についての記事が見られるが、その毛織物製品を指していると思われる文字が難しく、現代の如何なる毛織物製品に該當するのか分りにくい場合が多かつた。この點で、「氍毹」または「毼毼」と書かれた毛織物について明らかにされた藤田豐八氏の研究は貴重であつた。氏は、それらの毛織物が西域から輸入された「楊(椅子)」の上に敷かれた一種の敷物、またはカーペットであるということ^⑧を文獻的に明らかにされたのである。ターリム盆地地方の毛織物生産を文獻的な面から追求してゆく場合には、このような研究は必須なものであつた。そして以後、『漢代の文物』^⑨に至つてこのような研究は、出土した考古學的遺物とも對照することによって大きな前進をみることになる。

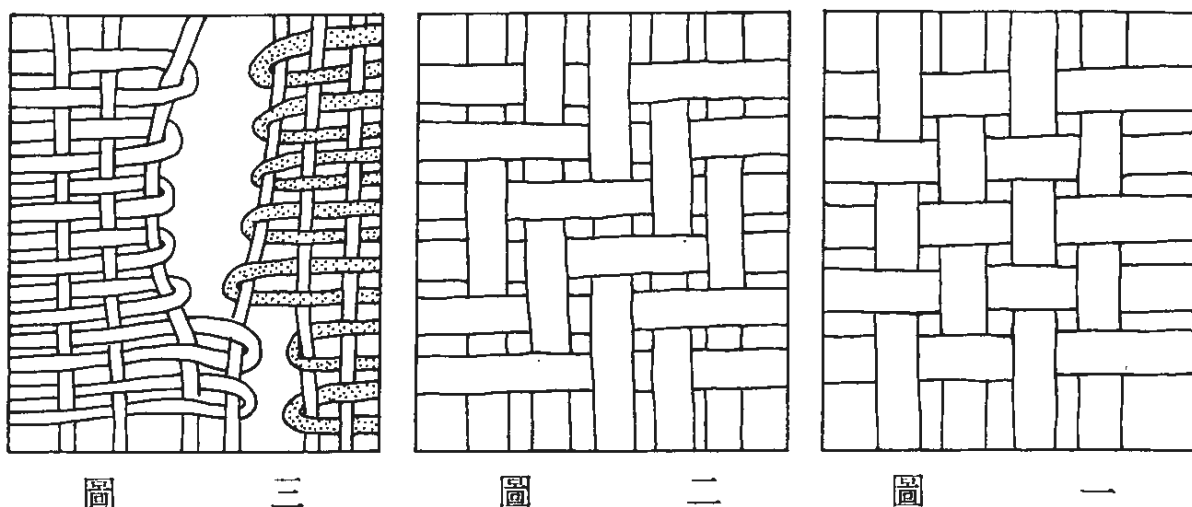
さて、ターリム盆地地方の毛織物生産について明らかにするためには、このような文獻的な面からのアプローチとともに出土した考古學的遺物自體の研究も必要であるが、この研究をしたのが Vivi Sylwan・太田英藏の兩氏である。まず Sylwan 氏は S. Hedin 氏が隊長となつた Sino-Swedish Expedition が Lop-nor 附近から發掘した毛織物製品、それ

に紡績工程など技術的な面から分析を加えられたのである。^⑨そして氏は、Lop-nôr 附近つまり樓蘭王國では比較的進んだ毛織物生産が行なわれていた、と結論づけられたのである。^⑩氏の場合、時代比定にもう一つ分らない点があるが、ターリム盆地地方の毛織物生産の技術的な面を明らかにした点で注目される。一方、太田氏は Stein 氏が Khotan 地域の Dan-dân-oiliq 遺址で發掘した所謂「絹王女圖」^⑪について、そこに描かれている織機が綴錦（この織り方については後に述べる）の毛織物や絹織物を織るのに便利だった、ということ明らかにされたのである。^⑫勿論、「絹王女圖」の中に描かれている織機であるから、當時その種の織機では綴錦の絹織物が織られていたのだらうと言っておられるのであるが、このような研究は Sylwan 氏の研究と同様、ターリム盆地地方の毛織物生産の技術的な面を明らかにした点で注目すべきものだったと言えよう。これら二氏によって、この地方の毛織物生産はより具體的なイメージを持つことになったのである。

そして最近、概説的なものながら中國とソ連の研究で興味深いものが書かれている。前者の例としては汪寧生氏のものがあるが、氏は、この地方の毛織物生産が纖維業の中でも最も古くから行なわれ、最も重要なものであった、と述べておられる。^⑬この氏の指摘は、短いながらも貴重なものを含んでいる。後者のものは Zh. Ncmanjoba-Mamedova 氏の研究で、一九〇二世紀この地方のウィグル族が織ったカーペットの模様について論じたもので、あわせてカーペットの使われ方や古い時代の状況についても少し觸れられていて興味深いものである。

以上、これ迄の研究状況を概観してきたのであるが、これによってターリム盆地地方の毛織物生産の重要性がかなり明らかになったことと思う。ただし、これまでの研究状況を全體的に見るとき、記述が斷片的であり歴史論文の專論と言えるものはほとんど無いのが實状である。そこで以下では、これら諸氏の研究も参照しつつ、ターリム盆地地方の毛織物生産について總括的にみてゆこうと思う。

二 毛織物製品について



『日本の美術』（至文堂、1967年）

No.12 「織物」

西村兵部編より転載

ここでは、タールム盆地地方の毛織物生産について述べる準備作業として、この地方から出土した考古學的遺物によって實際に作られていたと思われる毛織物製品をあげ、史書に記載されている毛織物製品の名と對照しておこうと思う。^⑥

この地方から出土した毛織物製品は、毛織物とフェルトに大別することが出来る。フェルトは經糸と緯糸で組織したものではなく、嚴密には織物とは言えないが、ここではそれも含めることにする。まず毛織物の種類であるが、ここでは(a)平織の毛織物、(b)斜文織の毛織物、(c)添毛織物、(d)綴錦の毛織物などに分けようと思う。(a)の平織の毛織物とは、圖一のような組織をもつ毛織物のこととで、織造技術としては最も簡單なものである。古くからこの地方で日常的に織られていた、と考えられるものである。實物を寫眞で見ることが出来るものとしては、Sino-Swedish Expedition が Lop-nor 附近の墓で發見した美しい縁飾りのある「マント」^⑦や、中國の發掘隊が吐魯番(Turfan)の哈拉和卓(Kara-khöja)古墓で發見したラクダ色の毛織物の斷片(64 TKM 3. 48)^⑧などが

ある。(b)の斜文織の毛織物とは、たとえば圖二のような組織をもつ毛織物のことで、經糸または緯糸が互に他の糸數本の上を走り、織物に斜の畝を出すようにしたものである。梳毛糸(短い纖維を除き長い纖維のみで作った糸で、光澤と均質さを持つ糸)を使う場合もあり、平織の毛織物より上質なものと言える。勿論、織造技術も平織より複雑である。中國の發掘隊が屋于來克(Dandan-oilik)で發見した藤纈染めを施された毛織物の斷片、Stein氏がMirān遺址で發見した赤レンガ色らしき毛織物の斷片(M. I. 0083b)などがその組織をもっている。(c)の添毛織物とは、たとえばカーペットなどによくみられるように、模様を表面に出すため基本となる經・緯糸のほかに、別に色糸を經糸または緯糸に絡ませた織物のことである。寫眞で見ることが出来るものとしては、Sino-Swedish ExpeditionがLop-nōr附近の墓で發見したパイル・カーペット(表面に出る色糸が輪状になっているもの)の斷片や、中國の發掘隊が尼雅(Niya)遺址で發見した同種のカーペットの斷片がある。3. Мамантова-Мамедова氏は、カーペットについて次のように述べておられる。「近東・中央アジア・極東の住民の間で、カーペットは非常に廣く普及している。このことは、人の住み得る家でヨーロッパ的な意味での家具が全く無いことが原因となっている。多くの種類のマット・フェルト・毛布・カーペットが長い世紀の流れの中で多種の家具の機能を果たし、同時に家のすばらしい裝飾の役割を果たした」と。やはり、タリム盆地地方では古くから日常生活に必要不可欠なものだったと考えてよいと思う。(d)の綴錦の毛織物とは、圖三のような組織をもつ織物で、多數の緯糸を別々に織り込まねばならないので非常な手間がかかるものである。この織法は、元來エジプト方面に起源をもつらしく、そこから東へ西南アジア・中央アジアと分布している。しかし、織るのに手間がかかり過ぎるので、しだいに緯糸(緯糸として複數の色糸をつかい、そのうちの一種のみを表面に出すようにして模様を出すようにしたもの)の織法がより盛んに行われていったようである。Stein氏がLop-nōr附近の墓から發掘した所謂「ヘルメス像」の綴錦の斷片(L. C. iii. 010. a)がその例である。これが實際タリム盆地地方で織られていたらしいことは、太田英藏氏が明らかにされたように、「絹王女圖」の織機が綴錦を織るのに適していたこと、そしてStein氏がNiya遺址で綴錦用の緯打ち具(後から通した緯糸

が先の緯糸と密着するように打ち込む器具」を發見していることによつて分るのである。

これら四種のもものが、ターリム盆地地方で實際に作られていたと考えられる毛織物であるが、これらの毛織物に劣らず多數製造されていたものに、先に言つたフェルトがある。フェルトとは、羊毛などの動物性纖維を長短混合して薄い莖狀とし、それを重ね合わせ濕氣・熱・壓力などを加え壓縮したもののことである。従つて織物ではなく、當然織機も必要としない。Sino-Swedish Expedition が Lop-nor 附近の墓で發見したフェルトの帽子など、遺物は各地に多數出土している。

さて、以上が考古學的遺物によつて明らかになつたターリム盆地地方産の毛織物製品の数々であるが、これらの毛織物製品が中國の文獻にはどのように記されているかを次に見てみよう。

中國の文獻では、この地方の毛織物製品に對して、「罽」「褐」「氍毹」「氍」などの文字が用いられている。まず「罽」であるが、これは『漢代の文物』で明らかにされたように、上質の毛織物を指しているようである。ただ、そこで言われているように、「罽」が(d)の綴錦の毛織物を指しているかどうかについてはもう一つよく分らないところである。ここではやはり、上質の毛織物ということにしておこうと思う。次に「褐」であるが、これは毛織物という以外にどのような毛織物を指しているのか分らない。ただ、後にみるように、史料にターリム盆地地方の被服としてよく出てくるものなので、後に述べる「氍」とともにこの地方では最もポピュラーな毛織物だつたと思われる。また「氍毹」については、先に述べた藤田豊八氏が「氍毹」「氍毹」とほとんど同じものとして扱つておられる。①それ故、「氍毹」は、「榻(椅子)」の上に敷かれた一種の敷物、またはカーペットと思われるのである。そこで(c)の添毛織物にほぼ該當するようなのであるが、ただ注意すべきは「氍毹」、つまり一種のカーペットは必ずしも(c)の添毛織物とイコールではないということである。つまり、カーペットは必ずしも常に添毛組織をもつていたとは限らないのである。故にここでは、「氍毹」は、ほぼ(c)の添毛織物に該當するもので、カーペットの一種だということしておく。そして最後に「氍」であるが、これは古

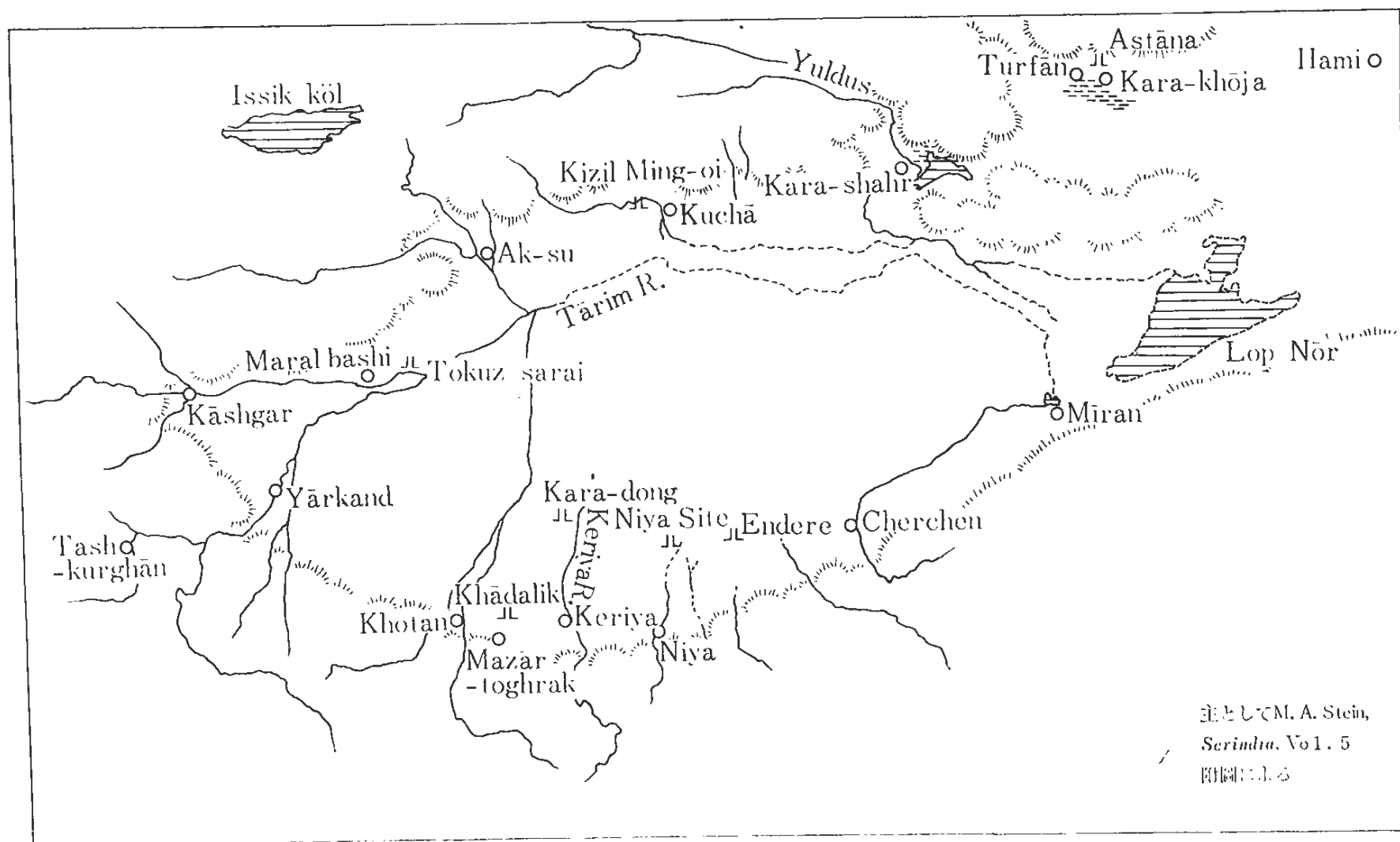
くから言われているように、フェルトのことである。すでに『漢代の文物』で指摘されているように、この「氈」は、ターリム盆地地方ではかなりポピュラーな被服の材料とされ、一方中国では「敷物」としてかなり廣範に用いられていたようである。

このように史書に記されている毛織物製品の名と出土した遺物との対照は、「氈」「氍毹」以外には、あまりはっきりと出来ないというのが實状である。ただ、ここで兩者を対照させたことによって、おぼろげながらもターリム盆地地方で生産されていた毛織物製品の現實が明らかになったのではないかと思う。

三 ターリム盆地五王國の毛織物生産

すでに見てきたように、毛織物製品は古來ターリム盆地地方ではかなり一般的な纖維製品であったようである。このことは、たとえば次のような史料によっても明らかである。五世紀初頭、この地方を通った法顯は、「自山（葱嶺山つまりほぼパミール山脈をさす）以東、俗人被服、粗類秦土、亦以氈、褐爲異」と述べている。この地方の被服が「氈（フェルト）」「褐（毛織物）」であるところに、中國のそれとの違いがあると言っているのである。この史料は、ターリム盆地地方で毛織物とフェルトがかなりポピュラーなものとして存在していたことをよく示している。このような状況について、ここではさらにより具體的に見てゆこうと思う。

なお以下では、ターリム盆地地方を高昌・龜茲・焉耆・于闐・疏勒の五王國に分け記述を進めてゆく。八世紀以前のターリム盆地地方の政治狀勢は、紀元前後いわゆる「三十六國」であったと言われている小王國が高昌・龜茲・焉耆・于闐・疏勒などの五（大）王國に統合されていく過程として見る事が出来る、ターリム盆地地方の毛織物生産についてみる場合にも、これら五つの各王國ごとに地域分けをして考えてゆくほうが分りやすいと考えるからである。



ターリム盆地地図

(一) 高昌王國 Turfan 地域

Turfan 地域でまず毛織物生産を推定出来るのは、考古學的遺物からである。先に述べた哈拉和卓(Kara-khoja)古墓で発見された毛織物の斷片(64 TKM 3. 48)^④がそれである。ラクダ色の平織の組織をもつものであるが、何に使用されていたのかはよく分らない。この墓からは建興三六(三四八)年の年次が記された柩銘が発見されており、四世紀前期のものと考えることが出来る。四世紀前期と言え、この地域ではまだ西域系の車師前王國が政權を立てていた頃で、この漢人(?)被葬者がこの地域で作られたこの毛織物を手に入れたのであろう。しかし以後、この地域では多數の墓が発掘されているにもかかわらず、毛織物製品が発見されることは非常に少ない。ただしこのことは、この地域で毛織物製品が作られなかったということを示すものではなく、發掘した墓の大多數が漢人(系)貴族のものであり、これら上層の漢人(系)貴族にあまり使用されなかったからだと思われる。たとえば、中國の發掘隊は阿斯塔那(Astana)で下層の貧しく搾取された人々二人の墓六八號墓を發掘しているが、その被葬者二人は「破氍(フェルトのボロ)」や柴で包まれていたという^⑤。詳しいことは不明であるが、この墓は三世紀から六世紀迄のものとされており、當時下層の人々にフェルトが使用されていたことが分るのである。

さて六世紀になると、この地域で「氍毹」つまり先に述べたようにカーペットの一種が作られ、中國へ運ばれていたことが推定出来る。乃ち『梁書』諸夷傳に、「大同中(五三六～五四六年)、(高昌王)子堅遣使獻鳴鹽枕・蒲萄・良馬・氍毹等物^⑥」と記されているのである。他の朝貢品は全てこの地域産のものと考えることが出来、「氍毹」自體もこの地域で生産され中國へ輸出されたものと考えてもよいと思う。

そして七世紀になると、唐王朝の支配力がこの地域に及び高昌王國は西州として唐王朝の一州となることによって、この地域の毛織物生産をうかがわせる史料も多くなる。まず『新唐書』地理志には、「西州交河郡、中都護府。貞觀十四年

平高昌、以其地置。開元中曰金山都督府。天寶元年爲郡。土貢、絲・氈布・氈・刺蜜・蒲萄五物・酒漿・煎臈乾^②とあり、西州の土貢として「氈」つまりフェルトが記されている。當時この地域の特産物であったフェルトが、唐の中央政府へ納められていたらしいことが分るのである。このフェルトの生産とその中央政府への納入は、次の史料によってさらに具體的に明らかとなる。それは、黃文弼氏が哈拉和卓(Kara-khoja)遺址で發見した古文書の二斷片で、その地の農民が本來あった古文書を裁截してしまったため二斷片しか残らなかったと言われているものである^③。左に二斷片の全文を掲げる。

(1)

(前 缺)

(上缺) 四貫文 已上准狀注所由柳中縣

(上缺) 所狀注所由蒲昌縣

(上缺) 疋二丈 所由高昌縣

(上缺) 十三端三丈五尺 氈十四領

(上缺) 戶曹王道忱欠未納

(上缺) 四升 所由里正范行忠

(上缺) 斗八升 所由里正寧和才

(上缺) 一十石二斗 已上所由牛慈惠

(上缺) 由里正馬善積

(上缺) 物 所由李義康寶焦藏等欠

(上缺) 典曹忠順

(2)

(上缺) 三斗 今日得李玉狀並納了

(上缺) 月十六日衙奉處分並限(下缺)

(上缺) 上依檢上件數未納(下缺)

(上缺)

(前 缺)

(上缺) 鄧大方 典宋叡芝 孫玄璋 康才感

(上缺) 一疋貳臈練布氈繩索雜物等

(上缺) 肆尺錢壹伯壹拾參貫參伯文

(上缺) 十石二斗粟

(上缺) 一石七斗二升麥

(上缺) 卅七疋二丈大小練

(上缺) 疋九尺生絁

(上缺) 十三端三丈五尺布

(上缺) 十四領氈

(上缺) 十九條索

(上缺) 毛綿

(上缺) 一十三貫三百文錢

(上缺) 五十五事氈、繩雜物

(上缺) 貫三百文 州徵所狀注所由高昌縣欠

(、點は筆者がつけたもの)

この文書の二斷片は、黃文弼氏が「西州徵物殘牒」と名づけられているように、西州で徵收された品目を記した公文書の一部である。特に未徵收のそれを記したものではないかと思う。黃文弼氏はこの文書について、先の『新唐書』地理志・土貢の記事を引き、「西州は唐朝の直屬の州縣であるから、租・庸・調の法も内地と同じである。ただ氈布（木棉布のことである——筆者）と氈とは高昌の特産であるから、布のほかにも氈を徵收したのである。このことから、西州は唐代には農村經濟と紡織工業がすでにかなり繁榮していたことを知ることが出来る」と述べておられる。注目すべき發言である。この古文書の二斷片、特にそこで記されている「氈十四領」が現地の西州の役所に納められるという事實によって、『新唐書』地理志ではこの地域の特産物として中央政府に納められたとしか分らなかったフェルト生産の現實が、より具體的なものとなったのである。

ところで、これまで述べてきたのは全て毛織物製品のことであつたが、ここにその原料となつた羊毛、その價值を窺わせる史料がある。それは大谷探検隊が持ち歸つた、いわゆる吐魯番文書の一つで、仁井田陞氏によって「價格表文書」として整理されたものの中にある。氏によれば、これらの文書は天寶年間（七四二—七五六）前後の Tuleg 地域の市の物價を反映しているらしい。左にその文書と、比較の都合上「綵花」つまり棉花の價格を示した文書を掲げる。

(1) 三〇五二號文書

(上缺) 花毛壹斤 (缺) 次貳拾五文 下貳拾文

春、白、羊、毛、壹、斤、 上、直、錢、參、拾、文、 次、貳、拾、伍、文、 下、貳、拾、文、

(2) 三〇八〇號文書

鹿綵壹尺 上直錢拾壹文 次壹拾文 (下缺)
 練鞋壹量 上直錢參拾文 次貳拾柒文 (下缺)
 練花壹斤 上直錢柒文 次 (下缺)

(、點は筆者がつけたもの)

この文書の斷片二つを較べてみると、「春白羊毛壹斤」が「練花壹斤」よりかなり高價であつたことが分る。ただ兩者の價格が他の物品の價格と較べて、どの程度高いのかあるいは安いのか、私にはもう一つよく分らないのであるが、ここで問題となるのは、藤田豐八・沙比提・日野開三郎の三氏がすでに指摘されたように、「練花」つまり棉花で織られた棉織物、すなわち「練」または「氈布」が當時「Kara-shahr」地域でかなり廣範に生産されており、それが中原へ運ばれてゆき、中原ではある程度貴重視されていたらしいことである。このような「練」または「氈布」の原料となつた「練花」より「春白羊毛」がかなり高價であつたということは、羊毛自體この地域ではそれほど安價なものではなかつたことを示している。勿論、羊毛といっても品質によつて價格は違い、ここで言う「春白羊毛」は上質のものを指しているのかもしれないのであるが、『隋書』西域傳には高昌國のこととして、「國中羊馬、牧於隱僻之地、以避外寇、非貴人不知其所」と記されているが、毛織物製品の原料となる羊毛をも供給してくれる羊は非常に貴重なものだったのだらう。

(二) 焉耆王國 Kara-shahr 地域

Kara-shahr 地域で毛織物製品の生産を推定出来る史料は、實質的には一つしかない。それは、七世紀前半この地域を

通った玄奘の「服飾氈・褐、斷髮無巾」^④という記事である。他に、『新唐書』西域傳上・焉耆國條に「俗祝髮氈衣」という記事があるが、この記事は玄奘の記事を縮めたものでしかない。もう他にはなく、實質的に玄奘の記事のみということになるのである。ところが、この玄奘の唯一の記事によって、當時この地域では「氈(フェルト)」や「褐(毛織物)」が被服の主流を占めていたことが分るのである。この地域では、毛織物製品は當時、そしておそらく當時までずっと、最も一般的な繊維製品だったようである。

ところで、ここで注意すべきことは、この地域では繊維製品の生産自體あまり盛んに行なわれていなかったと思われるふしがあることである。『周書』異域傳下にはこの地域のこととして、「養蠶不以爲絲、唯充綿纈^⑤」と記されている。養蠶は行なっていたが、繭から「絲(生糸)」を作らず、取れた繭を「まわた」として「綿纈(綿入れ)」用にしか用いなかったというのである。つまり、養蠶は行なっていたが絹織物は作らなかったらしいのである。この記事は六世紀後半の状況を示しているのであるが、當時の他のタリム盆地諸王國の状況を考えれば、養蠶は行なっても絹織物は作らなかったというのは、やはりかなり異常な状態だったのである。たとえば後に述べる于闐王國では、七世紀前半段階で養蠶業の開始が傳説化してしまっている程、絹織物生産が盛んである。その傳説については玄奘が報告しているのであるが、その中に興味深い一節がある。^⑥

初至也、尙以雜葉飼之、自時厥後、桑樹連陰。王妃乃刻石爲制、不令傷煞、蠶蛾飛盡、乃得治繭、敢有犯違、明神不祐。遂爲先蠶建此伽藍。數株枯桑、云是本種之樹也。故今此國、有蠶不煞、竊有取絲者、來年輒不宜蠶。

これは、桑の種子と蠶をこの國に齎した、東國(中國のことといわれている)の王女が、やっと養蠶業が軌道にのり出した時、蠶に感謝する意味で創始した制度と創建した寺(麻射僧伽藍)について述べた一節である。この王女の話のテーマにしたのが先に述べた Stein 氏發見の「絹王女圖」なのであるが、ここでは、蠶が蛾となって飛び出すまで繭を處理しないと述べている點が重要である。何故なら、こうすると蛾は繭を喰い破って飛び出すので、繭自體に大きな穴があき繊維も切

れてしまい、普通の生糸は作れなくなってしまふからである。このような繭は、綿入れ、用に用いるか、手で撚り合わせ太さの不均等な、つまり「絶紬（つむぎ）」に用いる糸にしか使えない。于闐王國では、それにもかかわらず、上質の「絶紬（つむぎ）」を作っていたようである。「出氈氈・細氈、工紡績・絶紬」と玄奘が報告しているように。ここで焉耆王國の場合に戻れば、この于闐王國と同じような繭の處理の仕方をしていて、その破れた繭を「綿績（綿入れ）」の、また、としてしか利用出来なかったのではないだろうか。つまり于闐王國のような、上質の「絶紬（つむぎ）」を作り出す技術が無かったのではないかと思うのである。このことは、當時のターリム盆地地方の絹織物に對する需要の高さから考えても充分想定出来ることである。焉耆王國つまり Kara-shahr 地域では、一般的に纖維生産自體が盛んではなかったように思われるのである。それ故、この地域では毛織物製品が最も一般的な纖維製品であつたにもかかわらず、それが上質なものであつたとは考えにくい。

古來この地域は、西に Yulduz 溪谷を控え牧畜業が盛んな所である。それ故、毛織物製品の原料となる羊毛を提供してくれる羊も多かったと思われるが、この地域の毛織物製品の生産は日常的レベルの需要を満たす程度にしか行なわれなかったのではないだろうか。

(三) 龜茲王國 Kucha · Ak-su 地域

この地域の毛織物製品の生産について史料上明らかになるのは、六世紀後半の『周書』異域傳の記事からである。すなわち異域傳下・龜茲國條には、「婚姻・喪葬・風俗・物産、與焉支略同、唯氣候少溫爲異。又出細氈・麋皮・氈氈・鏡多・鹽綠・雌黃・胡粉及良馬・封牛等」と記されている。「細氈（上質のフェルト）」と「氈氈（カーペットの一種）」とが生産されていたことが分るのである。

七世紀になると、玄奘の報告がある。玄奘はこの地域のこととして、「服飾錦・褐、斷髮巾帽」と述べている。この地

域の被服に、「褐（毛織物）」が用いられていたことが分るのである。ところで、この地域の毛織物製品はかなり上質なものであったらしい。それは、同じく玄奘が龜茲王國の一地方であった跋祿迦（Akshu だと言われている）について、「細氍・細褐、鄰國所重^⑤」と述べているからである。この跋祿迦地方では、上質の「氍（フェルト）」や「褐（毛織物）」が作られ、近隣の地方からの需要が高かったようである。これらの毛織物製品は、近隣の諸地方へ多く運ばれていたであろう。

さらに、八世紀前後の史料では、この地域の毛織物製品が中國へ土貢として運ばれていたことが分る。『唐六典』卷三の戸部郎中・員外郎條には「天下十道」の土貢が記されているが、そのうちの隴右道の土貢に對する李林甫の注には、「安西緋氍・硃砂・陰牙角・氍毹」と書かれている。「緋氍」は濃赤色のフェルトであり、「氍毹」とは「氍毹（カーペットの一種）」とほぼ同じものである。また安西とは、この場合龜茲地域をさしていると考えてよい。^⑥それ故、この地域からこれらの毛織物製品が土貢として中國へ運ばれていたことが分るのである。ところで、このような中國の中央政府へ送られた土貢、その數量を規定した史料が『通典』にみられる。『通典』卷六・食貨六・賦稅下には、「天下諸郡毎年常貢」として、「安西都護府 貢硃砂五十斤、緋氍五領」と記されている。この條では西州のことを交河郡と呼んでおり、『舊唐書』地理志三・西州條に「顯慶三年、改爲都督府。天寶元年、改爲交河郡。乾元元年、復爲西州」とあるので、この「天下諸郡毎年常貢」は、天寶元（七四二）年から乾元元（七五八）年にかけてのものであろう。この頃、この地域から毎年「緋氍五領」が中國の中央政府へ送られていたようである。この數は、先に述べた西州の「十四領氍」と較べてみると興味深い數である。

さて、既に述べたように、この地域では黃文弼氏によってカーペットの斷片らしきものが發見されている。それは、Kucha の西にある克子爾明屋（Kizil Ming-oi すなわち Kizil 千佛洞）の第十八洞で發見されたもので、麻布で裏打ちされ、元は多くの色糸で模様が施されていたと言われているものである。^⑦寫眞がもう一つ不鮮明なのであるが、添毛織物のようである。なお、同じ第十八洞から八世紀のものと推定されている漢文文書の斷片が出土しており、それ故、その添毛

織物を八世紀のものとされている。^⑤ 参考までにその文書の断片を左に記しておく。

(前 缺)

(上 缺) 磧^レ行軍押官楊思礼請取 (下 缺)

(上 缺) 闐鎮軍庫訖被問依 (下 缺)

更問 (下 缺)

(後 缺)

氏は、「磧」の上に「西」字を補い、「レ」によって逆轉させ「磧西」と讀み、楊思礼を磧西節度使麾下の行軍押官だと考えられた。^⑥ そして磧西節度使の名は開元十二(七二四)年から同二十七(七三九)年まで史料に見えるので、この文書の断片と、そして添毛織物とを八世紀のものとされたのである。

(四) 疏勒王國 Kāshgar · Yarkand · Tash-kurghān 地域

まず、この地域では、『北朝期(三八六～五八一年)』のものとされている毛織物の断片がある。それは、中國の發掘隊によって Kāshgar 東方 Marāī-bāshi の脱庫孜來(Tokuz-sarai)から發見された、『織花毛毯』と言われているものである。^⑦ 寫眞を見ると、報告でも述べられているように、綴錦の毛織物のようである。當地生産のものと考えてよいかどうかは、今のところよく分らない。

六世紀前半には、『梁書』諸夷傳の記事がある。同傳・西北諸戎・渴盤陁國條には、「出好氊、金・玉」と記されている。渴盤陁國は、白鳥庫吉氏によって Yarkand 西南の溪谷地 Tash-kurghān に比定されているので、この溪谷地で「好氊(良質のフェルト)」が生産されていたことが分るのである。

そして七世紀になると、玄奘の報告がある。まず、先の Tash-kurghān の溪谷地について、「容貌醜弊、衣服氍・褐^⑧」と記している。ここでは先の記事にあるように、良質のフェルトが生産されるとともに、焉耆王國の場合と同様「氍（フェルト）」や「褐（毛織物）」の被服が最も一般的だったようである。また烏鑑（白鳥氏によれば Yarkand にあたると言う^⑨）の地でも、同様の状況だったようである。すなわち、「容貌醜弊、衣服皮・褐^⑩」と述べられている。この地でも、「皮」や「褐（毛織物）」が被服の主流を占めていたらしいのである。

一方、この地域の中心地であった佉沙（Kashgar）の地では少し状況が違ったようである。この地について玄奘は、「出細氍・褐、工織細氍・氍氍^⑪」と述べている。「細氍（上質のフェルト）」や「細褐（上質の毛織物）」が作られ、「氍氍」すなわち「氍氍（カーペットの一種）」を作る技術が高かったと言っているのである。この地、佉沙では毛織物製品の生産が非常に盛んだったようである。『新唐書』回鶻傳下・黠戛斯條には黠戛斯の風俗として、「女衣毳・氍・錦・縠・綾、蓋安西・北廷・大食所貿售也」と記している。「毳」は良質な毛織物^⑫、「氍」は「褐（毛織物）」^⑬、ここで言う安西は松田壽男氏が指摘されたようにターリム盆地地方一般のことであろう。それ故、当時（九世紀のことと思われる）、この地佉沙からも黠戛斯（Kirghiz）へ毛織物が運ばれていたのではないかと思う。七世紀段階での毛織物製品の生産の盛んさを考えればおかしくない。

さらに、玄奘の記事にあるように、この地では「細氍（上質の棉織物）」も作られていたようである^⑭。このことは、八世紀初頭この地域を通った慧超が「土人著疊布衣也^⑮」と報告していることに確認出来る。この地では、一般的に繊維製品の生産自體がかなり盛んだったようである。

疏勒王國內では、當時、一方で羯盤陀（渴盤陀に同じ）・烏鑑などのように被服に毛織物が主流を占めていた地があり、一方で王國の中心であった佉師のように毛織物・棉織物など、繊維製品の生産自體がかなり盛んに行なわれていた地があったのである。

(五) 于闐王國 Khotan・Keriya 地域

この地域では、古くから毛織物製品の存在が確認される。『後漢書』西域傳には、「匈奴聞（于闐王）廣德滅莎車、遣五將發焉耆・尉黎・龜茲十五國兵三萬餘人圍于闐。廣德乞降、以其太子爲質、約歲給罽・絮^⑧」と記されている。于闐國が匈奴に對する降伏條件として、毎年「罽（上質の毛織物）」や「絮（まわた）」を納めることを約束したというのである。この地域では當時、上質の毛織物が作られていたようである。これは一世紀の状況である。

三～四世紀の状況を示すものとしては、Keriya River 下流附近の Kara-dong 遺址で発見された毛織物製品がある。Stein 氏によって発見されたもので、經糸に山羊の毛を用い緯糸に羊毛を用い、フェルトで裏打ちされたカーペットまたは上着の斷片といったようなものがあるが、寫眞で見ることが出来ない。この遺址から漢の五銖錢が発見されているので、氏によって三～四世紀に比定されている^⑨。

そして七世紀の状況としては、やはり玄奘の報告がある。「出氈^⑩・氈^⑪・細氈^⑫・工紡績・純紬^⑬」と、この地域で「氈氈（カーペットの一種）」と「細氈（上質のフェルト）」が生産されていたことを報じているのである。さらに、既に述べたように、太田氏が「絹王女圖」に描かれている織機は本來綴錦の毛織物を織るためのものであったと指摘されているように、この地域では綴錦の毛織物も作られていた可能性がある。このような多數の毛織物製品の生産の状況は、ほぼこの時期前後のものと考えられる Dandān-oilik・Mazār-toghrak・Khādalik などの遺址から多くの毛織物製品が出土していることによっても分かるのである^⑭。

ところで、その中でも Dandān-oilik から発見された毛織物の斷片二點^⑮は非常に興味深いものである。それは、中國の發掘隊が発見したもので、二點ひとまとめにして、藍色蠟纈毛織品^⑯と呼ばれている。どちらも青地に白抜きの花^⑰を描いたと思われる模様をもつ藤纈染めのものである。そしてその花^⑱は、一つの小圓の周りに七枚の花^⑲瓣を配すと

いうのが基本的なタイプとなっている。二點に違いはあるが、兩方ともこの基本的なタイプを維持している。ところが、この二點と同様の基本的タイプを持った、花、模様を染め抜いた藺縷染めの絹織物・綿織物が、この地域（ともに北地）からも発見されている。

① 藍色藺縷絹、の斷片 Astana 出土、西涼期（四〇〇～四二二年）。

② Knot-dyed fabric、の斷片 Erdere 出土、七～八世紀。

なお、②の Knot-dyed fabric、について発見者である Stein 氏は、北西インドで行なわれている Knot（裝飾用結）の染め方をされた織物と説明されている。青地に白抜き（抜）の藺縷染めをされた木棉の手さげ袋のようなものである。さてこのように各地から、花、模様の基本的なタイプをもった毛・綿・絹などの藺縷織物が発見されていることは、これらの地域間の密接な関係を物語るものである。六世紀前半の『梁書』諸夷傳には、高昌國のこととして、「女子頭髮、辮而不垂、著錦・縵・纓珞・環釧」と記されている。それ故、高昌地域で発見されたものは別としても、他の毛・綿の藺縷を施された繊維製品は、高昌方面から運ばれてきたのかもしれない。

さて、もとにもどれば、于闐王國では當時、多種の毛織物製品が作られるとともに、一方で絹織物や棉織物が非常な普及をしていたようである。「少服毛褐・氍・裘、多衣絁袖・白氍」と、この地域について玄奘は述べている。「毛褐（毛織物）」「氍（フェルト）」「裘（かわごろも）」を服するものは少なく、「絁袖（つむぎ）」や「白氍（棉織物）」を服するものが多かったというのである。それでは、今迄述べてきたような毛織物製品がしだいに用いられなくなったと考えるべきなのであるか。私はそうではないと思う。「絁袖」や「白氍」が當時非常な普及をみせた一方で、毛織物製品が上下各層に使用されていたと考えるべきだと思う。

于闐王國では、當時、毛・絹・棉といった繊維製品の生産自體非常に盛んだったようである。

以上みてきたように、八世紀以前のターリム盆地五王國は、焉耆王國など例外はあるものの、かなり盛んな毛織物生産を行なっていたようである。そしてさらに、その毛織物生産は單に盛んなだけではなかった。上質な毛織物を産み出すものでもあったのである。このことを示す明末の書『天工開物』の記事を左に掲げ、ここでの締め括りとしたい。

凡綿羊有二種。一曰蓑衣羊、剪其毳、爲氈爲絨片。帽襪遍天下、胥此出焉。古者西域羊未入中國、作褐爲賤者服、亦以其毛爲之。褐有粗而無精、今日粗褐、亦閒出此羊之身。(中略)一種喬芳羊(番語)、唐末始自西域傳來。外毛不甚蓑長、內毳細軟、取織絨褐。秦人名曰山羊、以別于綿羊。此種先自西域傳入臨洮。今蘭州獨盛、故褐之細者、皆出蘭州、一曰蘭絨。番語謂之孤古絨、從其初號也。(中略)機織羊種、皆彼時歸夷傳來(名姓再詳)。故至今織工、皆其族類、中國無與也。

結 語

「はじめに」で述べたように、從來、ターリム盆地地方の繁榮は中國の絹などの(遠隔地)中繼商業によって達成された、と考えるのが一般的であった。しかし、本稿で見えてきたように、八世紀以前のこの地方では同時に、上質な毛織物製品を生産し、それをもとにした様々のタイプの商業活動も行なっていたのである。この地方の毛織物製品は一方で、遠く中國や北方遊牧民へ運ばれていた。高昌王國の項でみた高昌王(子)堅の朝貢品や、疏勒王國の項でみた點戛斯方面へ運ばれていた安西(つまりターリム盆地地方)の毛織物などがそのよい例である。また一方で、この地方の毛織物製品はその内部でも流通していた。龜茲王國の項でみた近隣の地方へ運ばれた跋祿迦の上質な毛織物や、于闐王國の項でみた蘆鵝染めの毛・棉・絹の織物などがそのよい例である。このような自國産の上質な毛織物製品をもとにした様々のタイプの商業活動は、絹などの(遠隔地)中繼商業に劣らず、この地方の安定した繁榮に重要な意義を持っていたものと思う。

なお最後に附言的ながら、この地方の牧畜業(ここでは特に羊のそれ)のことについて觸れておきたい。『漢書』西域傳

には「西域諸國、大率土著、有城郭田畜、與匈奴・烏孫異俗、故皆役屬匈奴」^⑧と記されており、『晉書』四夷傳には龜茲國のこととして「人以田種畜、牧爲業」^⑨と記されている。從來このような記事に對しては農業のみが、しかもかなり否定的にはあるが、扱われることが多かった。つまりこの地方の牧畜業については、あまり言及されなかったのである。しかし、高昌王國の項でみた「春白羊毛」の例からも分るように、この地方の牧畜業はかなり重要なものだったと考えられるのである。この地方の各種の毛織物生産の基底には、羊などの牧畜業の存在があったのである。

註

- ① 足立喜六『考證法顯傳』三省堂、一九三六年。一五ページ。
- ② 『大唐西域記』卷一二、瞿薩旦那國條。なお本稿では、『大唐西域記附大唐西域記考異索引』（京都帝大文科大學編、一九一一年、國書刊行會、再版一九七九年）を使っている。
- ③ 拙稿「經濟面から見た中央アジアの研究史」『東洋史研究』第三八卷第一號、一九七九年。
- ④ 本稿では、地名の表記法は全て M. A. Stein, *Serindia*. 5 vols., Oxford, 1921 のそれに據ることにする。
- ⑤ Stein, *Ancient Khotan*, Oxford, 1907, p. 134.
- ⑥ 黃文弼『塔里木盆地考古記』科學出版社、北京、一九五八年。九二ページ。圖版六六。
- ⑦ 藤田豐八「楊及び髡髻氍毹について」一九二五年、『東西交涉事の研究』南海篇（荻原星文館 一九四三年）所收。
- ⑧ 林巳奈夫編『漢代の文物』京都大學人文科學研究所、一九七六年。
- ⑨ Vivi Sylwan, *Woollen Textiles of the Lou-lan People*, Stockholm, 1941, Reports from The Scientific Expedition to the North-western Provinces of China under the Leadership of Dr. Sven Hedin—The Sino-Swedish Expedition—Publication 15.
- ⑩ *Ibid.*, p. 96.
- ⑪ Stein, *Ancient Khotan*, pp. 259~260, Plate LXIII.
- ⑫ 太田英藏「織物」『古代史講座』一三『學生社』一九六六年。二七四~二七五ページ。
- ⑬ 同右。
- ⑭ 汪寧生「漢晉西域與祖國文明」『考古學報』一九七七年第一期。
- ⑮ 同右、三〇ページ。
- ⑯ Исмаилова-Мамедова Э. Космы уйгуров.—《Материалы по истории и культуре уйгурского народа》Алма-Ата, «Найка» Каз ССР, 1978.
- ⑰ 以下、織物に関する知識は、日本織物新聞社編『増補染織辭

- 典』（京都書院、復刻版、一九七四年）に負うところが多い。
- ⑮ Sylwan, *Woollen Textiles*, p. 76. Pl. XIII : 2.
- ⑯ 新疆維吾爾自治區博物館「吐魯番縣阿斯塔那——哈拉和卓古墓發掘簡報（一九六三—六五）」『文物』一九七三年第一〇期。一九ページ。圖四九。
- ⑰ 新疆維吾爾自治區博物館出土文物展覽工作組編『絲綢之路』文物出版社、一九七二年。〈説明〉三ページ。圖版一八ノ一。
- ⑱ Stein, *Serindia*, vol. 1, p. 478. Pl. XLVIII.
- ⑲ Sylwan, *Investigation of Silk from Edsen-gol and Lop-nor*, Stockholm, 1949, Reports from The Scientific Expedition to the North-western Provinces of China under the leadership of Dr. Sven Hedin—The Sino-Swedish Expedition—Publication 32. Pl. 23.
- ⑳ 『絲綢之路』〈説明〉三ページ、圖版一二。及び、新疆維吾爾自治區博物館「新疆民豐縣北大沙漠中古遺址墓葬區東漢合葬墓清理簡報」『文物』一九六〇年第六期、一〇ページ。
- ㉑ Kcmanroba-Mamedova O. Ykas. coy., c. 148.
- ㉒ ターリム盆地地方でも毛織の緯錦は發見されているが、本稿では都合上觸れなかった。
- ㉓ 前掲、太田。二七三—二八〇ページ。
- ㉔ Stein, *Innermost Asia*, 4 vols, Oxford, 1928. Vol. 1, pp. 231, 241, 253. Pl. XXX.
- ㉕ ⑲に同じ。ただし、氏は、綴錦の毛織物がターリム盆地地方で織られたと直接的には言っておられない。
- ㉖ Sylwan, *Woollen Textiles*, pp. 45—54 Pl. VII, VIII.
- ③① 前掲、林。一三九—一四〇ページ。
- ③② 前掲、藤田。六二六ページ。
- ③③ 前掲、林。一四〇ページ。
- ③④ 前掲、足立。二四ページ。
- ③⑤ ⑲に同じ。
- ③⑥ 同右、一二ページ。
- ③⑦ 新疆維吾爾自治區博物館「吐魯番縣阿斯塔那——哈拉和卓古墓群清理簡報」『文物』一九七二年第一期。九ページ。
- ③⑧ 『梁書』卷五四、諸夷傳、高昌國條。なお、この記事で「子堅」とあるのは、「堅」とのみすべきところである（大谷勝眞「高昌麴氏王統考」『京城帝國大學創立十周年記念論文集』史學篇、一九三六年。一二—一七ページ）。
- ③⑨ 『新唐書』卷四〇、地理志四、西州交河郡條。
- ④① 黃文弼『吐魯番考古記』中國科學院、北京、一九五四年。三六ページ。圖版二一・二二。
- ④② 同右、三六ページ。
- ④③ 仁井田陞「吐魯番出土の唐代取引法關係文書」『西域文化研究第三・敦煌吐魯番社會經濟史料下』（西域文化研究會、一九六〇年）所收。二〇四—二一四ページ。
- ④④ 同右、二〇七—二〇八ページ。
- ④⑤ 藤田豐八「棉花棉布に關する古代支那人の知識」一九二四年、『東西交涉史の研究』南海篇（荻原星文館、一九四三年）所收。
- ④⑥ 沙比提「從考古發掘資料看新疆古代的棉花種植和紡績」『文物』一九七三年第一〇期。
- ④⑦ 日野開三郎「唐代に於ける木綿布の生産」『佐賀龍谷短期大

- 學紀要』第一八・一九合併號、一九七三年。
- ④⑥ 『隋書』卷八三、西域傳、高昌條。
- ④⑦ 『大唐西域記』卷一、阿耆尼國條。
- ④⑧ 『周書』卷五〇、異域傳下、焉耆國條。
- ④⑨ ②に同じ。
- ⑤① 同右。
- ⑤② この記事で物産中の「鏡多」は、松田壽男氏によれば「鏡沙」とすべきところである（『古代天山の歴史地理學的研究』増補版、早稻田大學出版部、一九七〇年。四二三ページ）。
- ⑤③ 『大唐西域記』卷一、屈支國條。
- ⑤④ 『大唐西域記』卷一、跋祿迦國條。
- ⑤⑤ 松田『古代天山の歴史地理學的研究』、四二二ページ。
- ⑤⑥ 黃文弼『塔里木盆地考古記』、三七・九二ページ。圖版六六。
- ⑤⑦ 同右、三七・九五・九六ページ。圖版七一。
- ⑤⑧ 同右。
- ⑤⑨ 新疆維吾爾自治區博物館出土文物展覽工作組「絲綢之路」上新發見的漢唐織物」『文物』一九七二年第三期。一六ページ。圖版一〇。なお、この論文は『絲綢之路』〈説明〉のもととなった論文である。
- ⑤⑩ 白鳥庫吉「西域史上の新研究」一九二一～二三年、『西域史研究』上卷（岩波書店、一九四一年）所收。一六六～一七〇ページ。
- ⑥① 『大唐西域記』卷二二、竭盤陀國條。
- ⑥② 前掲、白鳥。一九六～二〇一ページ。
- ⑥③ 『大唐西域記』卷二二、烏嚧國條。
- ⑥④ 『大唐西域記』卷二二、佉沙國條。
- ⑥⑤ 「毳」については、『一切經音義』卷二に「尺銳反。三蒼、羊細毛也。說文、獸細毛也」とあるので、上質な羊毛のことだと分る。ここでは、それで織った上質の毛織物のことであろう。
- ⑥⑥ 「氍」と「褐」は、『大唐西域記』諸版本で常に異同がみられる字のうちの一つである。
- ⑥⑦ 先に出た「緜」・「氍」、そしてこの「氍」、次に出る「疊」などは全て、棉布をさすある種の音を寫したものである。詳しくは、藤田「棉花棉布に關する古代支那人の知識」を参照。
- ⑥⑧ 羽田亨「慧超往五天竺國傳彙錄」一九四一年、『羽田博士史學論文集』上卷（東洋史研究會、一九五七年）所收。六二六ページ。
- ⑥⑨ 『後漢書』卷八八、西域傳、莎車國條。
- ⑥⑩ Stein, *Serindia*, vol. 3, p. 1243. なお遺物番號は、Ka. I. 0016 である。
- ⑦① *Ibid.*, p. 1242.
- ⑦② ②に同じ。
- ⑦③ ②に同じ。
- ⑦④ Dandān-oīlik 出土の遺物については、『絲綢之路』・〈説明〉三ページ・圖版一八～二〇を参照。なお中國ではこの遺址を、北朝期のものとしてゐる。Mazār-toghrah・Khādalik 出土の遺物については、*Serindia*, pp. 172. 191. 193. 210 を参照。
- ⑦⑤ 『絲綢之路』・〈説明〉三ページ・圖版一八。
- ⑦⑥ 『絲綢之路』・〈説明〉四ページ・圖版五〇。
- ⑦⑦ Stein, *Ancient Khotan*, pp. 430. 442. Pl. LXXVI.

- ⑦⑨ *Ibid.*
 ⑦⑧ 『梁書』卷五四、諸夷傳、高昌國條。
 ⑦⑨ 『天工開物』卷上、乃服、褐・毳條。

- ⑧⑩ 『漢書』卷九六上、西域傳上、序。
 ⑧⑪ 『晉書』卷九七、四夷傳、龜茲國條。

The Handwoven Cloth Industry in the Tarim Basin before the A. D. Eighth Century

Yamamoto Mitsuo

The Tarim Basin before the A. D. eighth century is said to have enjoyed a great prosperity. Until now, this prosperity has largely been attributed to the region's role as a middleman for Chinese products in the East-West trade, particularly the silk. No doubt, the China trade occupied an important place in the economic life of the region; putting too much emphasis on it, however, will inevitably lead us to neglect other industries. In this essay I looked into, among those other industries, the handwoven cloth industry, which still is a major industry of the region. As a result, I have found out that it was as much responsible for the region's prosperity before the A. D. eighth century as the China trade.

The Structure of the *Shih-chi* 史記 and the Theory of Five Virtues

Ueda Sanae

The *Shih-chi* is written from the viewpoint of the circular theory of history 循環史觀, which reflects the system of cognition that the creation and destruction repeat each other eternally, shared commonly by the people of antiquity.

According to the *Shih-chi*, history began with the Yellow Emperor 黃帝 and then developed into a succession of dynasties, each of which enjoyed the protection of one of the five elements. The fall of a dynasty is due to either cataclysm or tyranny, a notion also common in the folk legends of the time. With the tyranny of the First Emperor of Ch'in 秦始皇, the greatest catastrophe befell and destroyed the civilization continued since the Yellow Emperor. Soon, however, from the *chaos* emerged Liu Pang 劉邦, who by slaying a serpent realized the *cosmos* and brought new life to China.